

Twenty wish

眠気の小五郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

旧タイトル『20の願い』

この作品はpixivでも投稿しています。

*ついさいきんのこと。

【Undertale】という、【やさしいRPG】がありました。
さいしょのうちは、しこうさくごしながらも、みんななかよくハッピーエンドをつかみとることができました。

ところがあるとき、Undertaleを「よなくあいするあまり、キャラクターたちをつぎつぎところしてまわるひとびとがあらわれたのです。

キャラクターたちは、なすすべなくニンゲンたちに、なんども、なんどもほろぼされではよみがえり、おなじじかんをいつたりきたりしていました。

しかし、キャラクターたちは、ゆだんしていたニンゲンたちのすきをついて、ソウルと【ケツイ】をうばいとることができたのです。ニンゲンのおおきなちからである【ケツイ】と【ソウル】をとられたひとびとは、まるでものいわぬしょくぶつのようになつてうごかなくなつてしましました。

ニンゲンたちはきょうふしました。

そのあまりにおおきなひがいに、【Undertale】というゲームは、いつさいのプレイをきんしされてしまつたのです。

そして、ひがいは、ゲームをプレイしていくまつさいちゅうのヒト

だけでなく、ただあるいていただけのせいねんにもおよんだのです。
ですが、それはしょくぶつニンゲンのよりもざんこくな、『し』だつ
たのです。

Under taleをあいするせいねんは、くるまにひかれなく
なつてしまつたのでした。

【Under tale】
【Twenty wish】

目

次

プロローグ	1
ゲームスタート	
遭遇	
V S フリスク?	
V S フリスク? 『2』	
*あなたは：	

25 20 15 10 5 1

プロローグ

僕の名前は鈴木優。高校生だ。

普通に学校に行つて友達と遊んだり勉強したりしているフツーの何処にでもいる人間。

そんな僕には趣味の1つとして、ほのぼのとしたゲームをプレイする、というものがある。

ほのぼの系のゲームのみしているのは、いくら架空の存在とはいえ命を奪うゲームはしたくなかったからだ。

けど、やっぱり戦うゲームもやってみたい……でも、ゲームキャラを傷つけたくない……。

そんな時、『Undertale』という誰も死ななくていいRPGを見つけたんだ。

戦闘とほのぼの、両方いいところ取りできるこのゲームを始めて、かなり引き込まれた。

僕は「yuu」という名前でUndertaleをプレイしていた。オメガフラウイーのセーブ機能を利用して攻撃してくるのには驚いたし、アズゴア戦では、リアル【決意】を抱いて木の棒で叩いた。そしてなんやかんやでハッピーエンドにたどり着いた。まあもちろん最初からやり直そうとしたけど、フラウイーの語りかけで一気にやる気がしぼんだよね。

で、近頃公式日本国版がリリースされるらしいど……プレイする気は無い。

公式版をプレイすることは、非公式版のみんなを消してしまうということになる。

せつかくみんなと仲良くなつて、フリスクが僕の手助け無しに生きられるようになつたんだし。フラウイーもフリスクの幸せを奪わないでつて頼んできたしね。

しょーがない。

公式版は気になるけど、キャラクターの幸せを取り上げてまでやりたいとは思わないしなあ。

…………さて、気分切り替えて勉強でもしよつと。

（つて、ノート切らしてたの忘れてた。

少しめんどくさいけど買い出しに行かないと…）

僕は家族にノートを買いに行く旨を告げ、家を出た。

……その、数時間後、居眠り運転の車に跳ねられて死んでしまうなんて思いもせずに。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

【s i d e o u t】

鈴木優が死亡した少し後。

とある電腦空間にてUnder taleのキャラクターである【キャラ】「サンズ」「フラウイー」が大勢集まっていた。

「ようやくこの日が來た」

そのうちの1人であるキャラが、大勢の自分たちに語りかける。

「まもなく、真新しいタイムラインが大量に形成されようとしている。そして、そのタイムライン達は、我々と同じく【player】のせいでぐちやぐちやに破壊されて弄ばれてしまうだろう」

全員が神妙な面持ちで頷き、中には過去を思い出したのか、涙を浮かべ『パピルス…』と呟く者もいた。

「だが、それは行くものか。新しいタイムラインに【player】達は浮かれ、油断している。……今こそ反撃の狼煙を上げるべきだ！奴らが犯してきた罪の数々を奴らにそのまま与える！このメンバーならそれができるはずだ！」

静かな歎声が電腦空間に響き渡る。

「LV20の私たちとソウルを6つ取り込んだオメガフラウイーたちがそれぞれの世界線に潜り込み【player】達に攻撃。サンズ達はサポートや移動を頼む。余裕があつたら攻撃に参加してもいい。……今こそ、積年の恨みを晴らす時だ……皆、健闘を祈る！」

おう、や、うん！など多種多様な返事をしてそれぞれの世界線に移

動しようとした、その時だつた。

「ちよつと待つて！」

1人のフラウイーが自分達を呼び止めたのだ。

その場の皆がそのフラウイーを振り返る。

この空間では全員に等しく平等に発言権があることを認められ、意見をすることは何らおかしく無いのだが……そのフラウイーは少しづ樣子がおかしかつた。

…それは何かといふと……キャラとサンズがいない、ということである。

そしてもう1つ。

「ボクのところの【player】は何も悪い事なんかしていないんだ！」

この、衝撃発言である。

「…おい、そこのフラウイー。そりやどういう事だ？」

大勢のサンズの内の1人がフラウイーに話しかける。

フラウイーは自分のところのplayerのことをぽつぽつと消え入るような声で話した。

「ボクのところのplayerは、ゲームヘッタクソで、何回も死んじやうような弱つちい奴だけど…Nルート一回。TPルート一回でゲームをやめたんだ」

ざわざわ……と喧騒が電腦空間を満たす。

『そんなplayerがいんのか？』

『けど、嘘をついているように見えないねえ』

『でも、信じ難たいよ』

「嘘じゃ無い！その証拠に、ボクのところのキャラは成仏したし、サンズだってフリスク達と地上でしあわせに暮らしている！そもそもここにボクのところの2人がいないことが何よりの証拠だ！」

吐き出される思い。しかし、やはり簡単には信じてもらえないらしく、演説をしていたキャラがフラウイーに問いかけた。

「まあ、君がそこまでいうならそなだらうけど、ただ飽きただけってことはないかい？」

その問いにフラウイーは冷静に切り替える。

「それこそないね。だつて、本当に飽きたなら、ゲームを起動して、リセットするか悩みに悩み結局しない……を1週間に1回もしないでしょ」

電腦空間のザワつきがさらに広がった。

と、ここで、とあるサンズがフラウイーに当たり前の質問をする。「お前さんの player の事はわかつたが……結局お前さんは何を言いたいんだ？」

フラウイーは即座にこう答えた。

「彼を……【yuu】を僕らのタイムラインに引き込みたい」
『はあ!』

最早ざわざわ通り越して喧騒である。

「静肅に！ 皆落ち着いて！ ……で、そこのフラウイー。それはどういうことかな？」

それを演説キャラがなんとか宥め、フラウイーを問いただす。

「彼の A.C.T. 行動には、まるでフリスクのように慈愛に溢れていたんだ。……もしかしたら、本当にボクらの全てを S.A.V.E. [決意] を抱けるかもしれない。ここにいる人たちも含めて……ね？ ……それには皆の協力が必要だ」

「協力ね……具体的には？」

フラウイーは緊張をほぐすかのように深呼吸をして、再び口を開いた。

「ボクのところの player に、他の player のソウルの力をを使つて救う力を……願いを叶える力を与えて、転生させたい」

【yuu】の運命やいかに……

ゲームスタート

……身体中が痛い。

筋肉痛とかではないが、全身に電気を流されたかのような痛みだ。
：けれど、時間が経つにつれて少しづつ薄れていくような物だから、
後遺症とかは残らなそう。

結構派手に車に轢かれたけど、案外生き残れるもんだね。

それに、目がまだ開かないから何かはハツキリとは分からないけ
ど、体の下にクツショーンが敷かれていたし、相当運が良かつたんだ
なあ（安堵）

……お、痺れが切れてきた。

手足の感覚も戻ってきたみたい。

で、感覚が戻ったんでクツショーンになつているものを触つてみる。

「……これは…花、かな？」

だとしたら不可抗力とはいえ下敷きにしまつたことに罪悪感を抱
く。

（…身体も随分回復したし、さつさと退くことにしよう）

僕は少し勢いをつけて飛び起きた。

そして、固まつた筋肉をほぐす体操を軽く行つている時、はたと氣
づいた。

——なんで、こんなに静かなんだ？
仮にも人が車に轢かれたのに喧騒の一つも聞こえてこないなんて
有り得ない。

それに、僕の周りには偶然出くわした友達がいたし、結構仲が良
かつたから駆け寄つて来てくれるのが自然だと思つたんだけど…。

更に言えば、僕が轢かれたのはデパート付近で、車通りが多くエン
ジン音が聞こえないのは不自然だ。

だけど、目がまだ開かない以上は文字通り手探りで状況を確認せね
ば。

「取り敢えず、四つん這いになつて這つていこう」

幸い僕の格好は汚れても大丈夫な服装だったので、躊躇いもなく地

面に手足をついた。

「んー地面はちょっと湿ってるなあ。となると、花に水でもやつた後か。誰かが管理でもしているのかね?」

思考を口に出しながら、所謂ハイハイでよたよた進んだ…が、以外にも終着点は近く、壁にこつん、と軽く頭をぶつけてしまう。

「痛つ…あれ?この壁、もしかして岩?」

仮にコンクリートにぶつかったとしても、こんな大きな凸凹は無いはず。

「冷んやりしてるー。気持ちいー」

僕はペタペタと壁を触つて、ついでに頬をスリスリしてみた。紛う事なき岩の感触で、とても冷たい。季節が夏ということもあって、冷んやりしているのは有り難い。

……けど、謎が解けた訳じやない。

デパート付近にこんなスポットは無かつたし、流石に車にぶつかつたくらいの衝撃じやあぶつ飛んでも数メートル程。

そんなんじゃ、こんな絶好の涼める穴場に入ることなんてできないだろう。

「てことはあれか。転生したら岩場だつた件的な。……いや、岩場にいた件、か」

ライトノベルや2次創作に有りがちな設定を実際に目の当たりにして、流石に気分が高揚します。

……けど、死ぬ前にユニークスキルを習得したり、神様に会つたりした覚えはない。

「なら、特に転生特典が要らない平和な世界?…それとも特典はあるけどまだ使える状況にないとか?」

だとしたら、この開かない目に何か秘密があるんだろうか。今現在機能していないの視覚だけだし。

……うーん鉛のように瞼が重い。

何かしらのアクションが必要なんだろうか?

まあ兎にも角にも、ここから動こう。移動すれば、ここを管理している人に会えるかもしれない。目が見えないから壁をつたつしていく

しかないけどね。



壁伝いに歩いていると、明らかに天然の岩ではない柱を見つけた。一定間隔で縦線が入っていることから柱と判断したけど、ここは人工的に造られた場所なのかな。

管理された花に人工的に造られた柱と思わしき物。人が見つかる可能性がグン！と上がった！やつたね優ちゃん！助けが来るよ！

：なーんてね。こんなんで助けが来るわけが

【！】

「えつ」

*フロギーがこちらに歩いてきた！

「えつ！」

【FIGHT】【ACT】【ITEM】【MERCY】

ふふふふふフロギー！？って、目が見えるっ！それに戦闘画面！？

どーなつてんの！？

それに、このコマンド欄！

完つ全にUnder taleじやないか！

もう一度言おう、どーなつてんの！？

と、とにかく【ACT】だ！

*調べる *褒める *脅す

し、調べる！

*フロギー——ATK4 DEF5

*カエルもつらいよ。

……あれつ？

フロギーの調べるつて確か、『この敵にとつて人生とは難題そのものようだ』的な文章じやなかつたつけ！？

なんで僕の知つているやつじや無いんだ？！

*ケロケロ（人間さんまた落ちてきたケロ？）

「え、またつて？」

……ふう、少し落ち着こう。そしてフロギーの話をしつかりと聞く。

*（うん。だつてさつき、シマシマの服を着た無表情の人間さんがここを通ったケロからね）

「それつて…」

Under taleの主人公であり、地下世界のモンスターと友達になりまくつたビツクリ人間。

そして、ゲーム最後にてその名前が明かされる人。

「リスク：」

Under taleの主人公がここにいるのは全くもつて問題ない。寧ろ、異分子は僕の方だ。

それに、僕はセーブ出来ないだろうし。

Under taleのセーブファイルは1つしかなく、より決意が高い方にセーブ権が移る。

僕のちつぽけな決意でリスクのケツイを上回れる訳がないし…。つまり、僕はやり直しができない。正に負けたらそこで試_合終_了了_{ケツイ}人生終わり。

：あれ？ そういうばなんでフロギーは攻撃してこないんだろう？

あ、そういうえば最初のテキストも『襲いかかって來た！』ではなく『こちらに歩いてきた』だつたし。

その辺聞いてみよ…あーでもACTのコマンドに話すつてあつたつけ？

【ACT】

*調べる *褒める *脅す *話す

あつた。いや、増えたのかな？

兎に角、実行してみよう。

*話す

「ええつと…あなたはなんで攻撃してこないんですか？」

*フロギーは少し悲しそうな顔で答えた。

* (人間さんは僕たちの魔法で傷つきやすいのを知らなくてね……。
結構な傷を与えてしまったケロ。だから、こここのモンスターはみんな
人間さんに魔法を使うのを禁止にしたんだケロ)

「そ、うなんだ……」

モンスター達が禁止するくらいに酷い傷を負ったのかな……。大
丈夫かな、フリスク。

……あ、なら。

【A C T】

* 交渉

「ねえフロギーさん。僕をその人間のところに連れて行つてくれない
かな? 僕も、同じ人間としてその子の事が心配なんだ」

* フロギーは微笑みながら（？）返答した。

* (わかったケロ! 同じ人間さんがいた方があの人間さんも心強い
と思うケロし)

フロギーがそう言い終わると同時に、今まであつたコマンドが消
え、戦闘画面が終わつた。

変わつている事があるとすれば、戦闘画面じゃなくなつても目が見
えるようになつたということかな。

* (それじゃあ案内するケロ!)

フロギーは一つジャンプすると僕の頭の上に飛び乗つた。普通の
力エルより体格がある分筋力も増していきから、これくらいは楽勝な
んだろうね。

「うん、少しの間だけよろしくね」

さて、少し変則的だけど、ここから僕の【Under t a l e】が
幕を開ける。

(まだまだ先のことだけど、寿司ネキや、もふうさ王にどう対応するの
か、悩みどころだなあ)

僕はそんな事を考えながらR u i n sの入り口の門をくぐるの
だつた……。

遭遇

僕はフロギーにRuin……いや、遺跡を案内してもらつていた。

僕がゲームのUnderTaleをプレイしていた時と内装は変わつていなけれど、現実であることによつて色々と違つた景色が見える。

例えば、ゲーム画面からは影になつて見えない所にちつちやなキノコが生えてたりとかね。

それ以外だと、フロギーとの戦闘時と同じく、壁に書いてある説明文が変わつていたりしていた。

……多分、UnderTale公式日本語版と思われる。
んく確かに僕は公式日本語版をプレイしてみたかったけど、まさかこんな形で叶うとは夢にも思わなかつたなあ…。

まあ、後変わつたことと言えば、本当にモンスター達が僕に魔法攻撃をしてこないことくらい。

念のために回収しておいた【モンスターあめ】を使う場面も無くスマーズにトリエルさん家の前まで辿り着いた。

あ、そうそう、回収したと言えば【おもちゃのナイフ】もあるか確認してみたけど、既に持つてかれた後みたいだ。

*（ついたけ口。残念だけど、案内できるのはここまで。後は人間さんに任せるけ口）

「うん。ありがとう、フロギーさん。また会う機会があつたら、その時はよろしくです」

*（ケロツ）

フロギーとも別れて、僕はトリエルさん家の庭に足を踏み入れた。「やつぱり、この大きな木は枯れてるね…」

元々なのか、お世話を怠つたのか。：トリエルさんの性格を鑑みてに前者だと推測される。

「何はどうあれ、中に入ろう」

まず、トリエルさんに会おう。家主に挨拶もせず家宅捜査なんて失

礼すぎるからね。

「お邪魔しまーす！」

僕はトリエルさん家に踏み入った。



「……あれ？」

返事がない。

けど、その代わりに聞こえてくる声。

「……やめて…！…どうしたの!? 返事をしてちようだい！」

『ああああああああああああああ！』

明らかに争っている音だ！けど、Under taleにこんなイベ
ントはなかつた筈だし…。

「兎に角、様子を見ないと…！」

僕は音が聞こえる方向…原作におけるリスクの部屋へと向い、
扉を開ける。

「えつ、ドアが勝手に…つきやあ!?」

「うわっ!?」

すると、中から結構な勢いで飛び出してきたトリエルさんと衝突し
て押し倒された体制になってしまう。

(も、モフモフや…………ッ!)

トリエルさんの毛を堪能するのも束の間、凄まじい【殺意】を向け
られる。僕は咄嗟にトリエルさんを抱きしめて、出口の方までゴロゴ
ロ転がり、体制を整えて問い合わせた。

「大丈夫でしたか!?」

「あ、あなた……いえ、今はそんなこと気にしている場合ではありません
んですね。私は無事だけど、あの子が……」

「あの子?」

トリエルさんは先程までいた場所を指差す。

その場所には、シマシマの服を着て【おもちゃのナイフ】らしきも
のを振り切った格好のまま止まっている、物凄く見覚えのある子供が

主人公

立っていた。

けど、様子がおかしい。

一見普通の人間にしか見えないけれど、何と言うべきか、こう、禍々しいオーラを纏っているようにも感じられる。例えるなら、怨霊のようだ。

だが、驚いたのはそれだけではない。

「おもちゃで家つて斬れるもんだっけ…」

緊急回避を行つたせいで攻撃エフェクトは見えなかつたけど、ナイフの軌道上には綺麗な斬撃後が残つており、完全に物理法則を無視していた。

いや僕物理法則詳しくないけどね。

僕がこうやつて冷静でいられるのはきっと、驚きが一周回つたからに違いない。

……すると目の前のヤツは顔を俯かせながらもこちらに体の方向を変え、ゆっくりと歩み寄つてきた。

……此処にいても良いことはなさそうだ。

「一旦外に出ましょー！」（じや少し狭い！）

「…わかつたわ！」

トリエルさんに指示を出しつつも、相手がどんなAC行T動をしてきても対応できるよう目だけは離さずに。

……しかし、それがいけなかつのだろう。

ヤツはバツ！と顔を上げて僕と目線を合わせる。

すると世界がモノクロに切り替わり、お馴染みのコマンドとテキストが出現する。

* フリスク？が襲いかかってきた！

「やられた…！」

無理やり戦闘に持ち込まれた……一先ずは僕のターンだけど…。

【MERCY】

* 見逃す

選択肢には【逃げる】選択肢は存在しなかった。

(まあ、これは何となくは予想出来たかな…)

僕はM E R C Y から離れて、 A C T のコマンドに触れる。

【A C T】

*調べる *話す

この二つだけ…。

だけれど、まだ話す余地はあるみたい。
だつたら……。

【A C T】

*話す

「ねえ、君はさ、何で急に襲いかかってきたのかな？」

相手をなるべく刺激しないように、そして、友好的な態度をとつて
話しかける。

*リスクは何も答えなかつた。

が、そんな工夫も虚しく僕のターンは終わり、敵のターンに入つてしまふ。

もう何回も見てきた画面が目の前に表示されたかと思つたら、追加
説明がついていたようだ。

*腕を振った方向にソウルが動く。

僕はその言葉を信じて、試しに右腕を右方向へと振つてみる。する
と、僕のソウルは右方向へと移動。どうやら正しかつたみたい。

*【F I G H T】*Y u u

……そうこうしている間に敵さんは僕におもちゃのナイフで斬り
かかってきて、画面中央で攻撃エフェクトを发生させる。

”ズバアッ!!

”ビキイツ!”

「ええ……」

その攻撃はソウルを動かす画面にすらもダメージを与え、ひび割れ
を起こしていた。：多分、一撃でも食らつたらG A M E O V E R な
即死攻撃。

……ターンは再び僕に回つてくる。一時の安全は確保されたけど

……正直、震えが止まらない。

*怖い。だが、それでも戦^{やる}うしかない。

テキストの言う通りだ。

逃げられないけど、戦わなかつたら死ぬだけ。
必死で避けまくつて和解の道を切り開いてみせる！
僕は……僕なりにちっぽけな【ケツイ】を抱いた。

*フリスク？は不気味に微笑んでいる。

……上等だよ。

何で攻撃してくるかわからないけど、絶対【MERCY】してやる
！

その為にも、僕は震える手を抑えながらACTコマンドに手を伸ば
した――！

VSフリスク？

【ACT】 *調べる

*フリスク? LV20 ATK99 DEF99

*playerのケツイをその身に宿す子供。

*ケツイの持ちようでステータスが上下する。会話が成立すると
は思えない。

辛辣だね…。それにしても、レベルオブバイオレンスことLOVE
が20もあるつてことは、このフリスクは地下世界のモンスターを倒
したつてことなのかな。

…俄かに信じられない。だつて、存在自体がMERCYのような
善人のフリスクが、そんな恐つそろしいことをするなんて。

「…………」

【FIGHT】 *Yuu

けど、まずはフリスクの攻撃を凌がなきや。

【!】

四角い画面の真ん中に【!】が出現。
ソウルを右に動かして攻撃を回避ッ！

”バキイイイツ!!”

僕の今までいた場所にはナイフ攻撃のエフェクトが現れ、画面にヒ
ビをいれる。そこに留まっていたら、僕も同じ運命を辿っていたと思
うと、ゾツとした。

【!】

フリスクはそんな僕には御構い無しに、間髪いれず今度は僕のいる
右側に【!】が出てきた。今度は左斜め上へとソウルを移動させて再
び回避。

【!】

安心したのもつかの間。今度は画面の上半分が【!】表示になつて
いて、慌てて下へと操作。

【!】が表示された所をナイフが横薙ぎに通つていく。

かなりギリギリだつたけど、当たり判定ではなかつたみたいで、

ノーダメージで切り抜けることができた。
けど画面はバツキバキ。あと1ターンくらいしか持たないだろうね。

……さて、僕のターンだ。

* フリスク？は汗をかいている。

【FIGHT】【ACT】【ITEM】【MERCY】

とりあえず、今持っているアイテムを確認しよう。

何かあれば、この状況を突破する切り札になるかも知れないしね。

【ITEM】

* モンスターあめ * 決意

* 棒切れ * 紋創膏

待て待て待て！モンスターあめはさつき拾つたし、棒切れや紋創膏は初期装備だからまだわかるよ？けど、持ち物に決意が混ざつてんのは意味わからん。全然わからん！

だつてこれゲームだつたら、『無くならない全回復アイテム』を常に持ち歩いているつことじやん。

しかもセーブできるから、難しい戦闘の攻略も、グッと楽になる。
「せめて【ACT】にあつたならまだ納得できるんだけどね！」
なぜアイテム欄。

……まあ今考へても答えは出ないだろうし、この決意がどんな効果を及ぼすのか、試そう。

セーブ、出来るかな……？

【ITEM】 * 決意

* あなたは決意を抱いた。

* HPが全回復した。

* だが、決意が足りずセーブができなかつた。

「ダメ…かあ…」

薄々感づいてたけどね。だつてフリスクの決意を上回ることなんて出来っこないし。

* フリスク？は決意を抱いたあなたを見て、苦しそうな表情を浮か

べた。

……え？ 今のメッセージどういう…！

【FIGHT】 *Yuu

……おつと、集中集中ツ！

「今度はどんな攻撃を仕掛けてくる？」

画面を食い入るように見つめ、何が起きても対応できるように右腕を構える。

【!】

すると、【!】がど真ん中に円状で現れた。

とりあえず左下にソウルを操作して、【!】から離れる。 ……僕が離れてから数瞬遅れてその【!】の場所からナイフが飛び出してきた。まるで花を咲かせるかのように。

けど、全部が一気に襲いかかってくる訳じゃなくて一個一個、刃の向く方角にまっすぐ飛び出しているんだ。

北から時計回りで飛び出していくんだけど、1つ出てから次が出るまでほんの少しインターバルがあるみたいで、その間を縫つてソウルを安全地帯へと導いた。

タイミングは測りやすく、割と避けやすい部類の攻撃で良かつた

…。

* フリスク？ の汗の量が増えてきた。

……いやな予感がする。

このままだと、確実に良くない方向へ進む。

そんな確信が僕の中に生まれた。

(今は安全だし、良く考えよう)

【ACT】 *考える

まず、メッセージウインドウからわかる事を纏めてみよう。

* player のケツイを宿している。

* 決意を抱いたら苦しそうな表情を浮かべた。

*汗をかいっている。

*ケツイの持ちようでステータスが上下する。
気になるのは大体この4つに分けられるかな。

……んーと、playerのケツイを宿すつて書いてあつたけれども、今は誰にも操作されてないよね？

寧ろ、この状況だと僕が操られる立場だし。

てことは、僕以外のplayerのケツイを宿しているつてことかな？……あれ？ そうなると、僕以外の誰かがリスクを操作してい るつて事になるのか？

うーん…。どつちが正しいのだろう？

まあ、恐らく後者の可能性はあると思う。だつて、ラスボス相手にも手を差し伸べたリスクがモンスター達を手にかけるなんて有り得ないし。

まだ誰かに強制的にやらされた、といった方がしつくりくる。

……あ、でも、もう一つ可能性がある。

*playerのケツイをその身に宿す子供。

最初のACTではこのように紹介されていた。

実は、Undertaleには虐殺ルートなるものが存在する。流石に噂程度しか耳にしなかつたけど、地下世界のモンスター全てを倒していく、という残酷なルート内容。

フリスクは偶然……いや、Undertaleは空前の大ヒットを記録したんだから、虐殺ルートを通ったplayerは数多く存在すると思う。

もしかしたら、今、Undertaleにplayerは僕以外いなくて、行き場のなくなつたケツイは主人公であるフリスクに集中。そして、そのケツイの持ち主であるplayerの犯した罪まで一緒に宿したため、LOVE20という高ステータスになつてしまつた、と…。

そして、そんな大人数の悪の決意に当てられたフリスクは気が狂つ

てしまつたんだろう。

……こう考えると、色々辻褷が合うね。

* フリス^k? は決意を抱いたあなたを見て、苦しそうな表情を浮かべた。

というウインドウメッセージも、決意を取り込みすぎたせいでこうなつてているのに、目の前で決意を抱かれたら、そりやあいい気分にはならない。

……あれ? でも、仮にそうだとしたら、『怒りの表情を浮かべた』つて表記にならない?

実際には『苦しそうな表情を浮かべた』となつてている。これ、他に原因があるんじやないかな?

僕は一度、ここまで戦つてきて感じたことを振り返つてみる。
……ええっとたしか、

* フリス^k? の汗の量が増えてきた。

のメッセージが出てきた時、いやな予感がしたんだよね。僕のこういう時の勘は、大抵当たってしまう。

でも、僕のそれは俗に言う【野生的勘】ではなく、『体験に裏付けされた勘』なんだ。

簡単に言えば、過去に一度経験したことを体が覚えていて、また同じような事態に陥ったとき、自然と嫌な予感として現れるってこと。つまり、今、この勘が働きかけたつて事は、Under taleのゲームに何か同じようなキャラがいたはずだ!

誰だ? 誰だつけか!?

……ああつもう! なんで思い出せないかな!

[FIGHT] * Yuu

「あつ! 時間切れ!? 良いところだつたのに!」

僕は思考を一旦切り替えて、フリス^kの攻撃に備えたのだつた
……。

VSフリスク？『2』

【F I G H T】 *Yuu

ボロボロになつた画面が表示される。

それと同時にフリスクの攻撃が始まつた。

【!】

「ど真ん中だ！」

いつもの攻撃マークは画面の真ん中を記している。

【!】 【?】

!?

なんかそれに少し遅れてこのマークが出てきた！

【?】 マークなんて初めて見たよ！

【!】 は普通に攻撃だろうから今回はソウルを右へと移動させ、攻撃を待とう。

【ザンツ！】

【ザンツ！】

「わっ!?」

……も、もう持たないとは思つたけどまさか真つ二つに割れて、僕のソウルがないところ…先程【!】と記されていた画面を叩き割るとは思わなかつたよ…！

【?】 マークは安全地帯つてことなのかな…。

【!】 のマークがでた場所のナイフエフェクトが赤色だつたことを考えるに、ケツイの乗つた即死攻撃だつたのかもしれない。

【!】 【!】

【?】

嘘ツ！まだ終わつてないの!?

と、とにかく下だ！下に逃げないと！

【ザンツ！】

【ザンツ！】

【ザンツ！】

H P : 17

「いつ!?」

安全なところに逃げたはずなのになんでダメージが!?:もしかして【?】マークは安全じやなくてただ弱い攻撃が来るか攻撃が来ないかランダムってことなのか!

*どうする?

【FIGHT】【ACT】【ITEM】【MERCY】

……僕のターンだけど……本当にこれどうしよう。

戦闘画面は8分の1になつて避けにくくなっているし、即死攻撃は怖い。

そうでなくともランダムでダメージを受ける。

回復は嫌な予感しかしない決意とモンスターあめが1つ。

そして、覚悟はしていたけど、ダメージを受けると本体の僕にも傷ができる。

現に背中に大きな切り傷の感触があるし、ジクジクするような痛みが発生している。

だから体力が0になると本当に死ぬ。

しかもケツイは向こうのが上だからロードも不可。

僕はフリスクじやないから

*そんなのお断りだ。

なんて出来ないし…。

……ああ！もう！

ここで悩んでも絶対に謎は解けないっぽいし、とりあえず【ACT】に変化がないか確認しないと！

【ACT】

*調べる *話す

*口説く *煽る

待つて。

本当に待つて。

この危機的状況でなんで口説くがでてくるのさ。

そりやあ…まあUnder taleって半ば口説きゲームみたいなところは一部あつたけども。

話も通じない状態で口説くは本当に意味がないと思う。

第一、自分を操っていた奴に口説かれても絶対に断られるでしょ。最悪殴られて死ぬよそれ。

でもUnder taleだしなあ…不思議なことが起こつても何らおかしくない気もする。

これがただのゲームだつたら迷いなく選んだけども、流石に命かかつてゐ今はやめておこう。

そうなると、残る選択肢は

【ACT】

*調べる *話す

*煽る

の三つ。

…正直に言つて、あのランダム攻撃が始まつて、更に戦闘画面が小さくなつた今、次のターンでほぼHP使い切つてしまふ未来が見えてる。

慣れないと、とこん下手くそになるからね、僕。

だがら、最低でもこのターンで確実に欲しい情報を集めて生き残り、次のターンの行動までに推理する必要があるんだけど…。

「僕がプレイしてきたのはNルートTPルートと呼ばれるものだつたよね…」

そして

*フリスク? の汗の量が増えてきた。

に嫌な予感を覚えて思い出そうとしてフリスクの攻撃が始まつた。で、僕がプレイしたルートの中にヒントがあるのはわかっているんだけど…。

…『汗』というキーワードに当てはまるキャラクターなんていたつけ?

いるとしたら戦闘がなかつたショッピングの店員さんとか、町の住民とか…グリルビーの炎でみんな汗をかいてそうだけど関係なさそうだ

しこれは考えなくていいかな。

主要メンバーだつたら…トリエルさんともふうさ王はそもそも毛に汗が吸収されそうだし、アンダインは運動とかその辺の理由でよくかいてそう。

ナップスタは汗つてよりは涙出してたし、

メタトンは機械ながら汗の代わりにオイルとか漏れてそう（＊アイドルになんてことを！）

フラウイーと骨兄弟に至つては骨と花だから汗かかないし…あ、でもモンスターだからそういうのもあるのかな？

アルフイスとか焦つた時に結構汗書いてたイメージあるなあ…。ん？ アルフイス？

嫌な予感？

……………あっ！

「あの研究所のモンスター!!」

*ピクツ、と反応した……ような？

ハツキリとはしないけど反応した時点で何らかの関わりもしくは共通点アリつてことだよね！

つて、ちよつと待つて？

てことは、嫌な予感はそこにあるつてことだから…つまり、

あのモンスターたちと同じような状況に陥っている、ということ？

「うそ…」

たしか、死期がちかくなつたモンスター達に人間のケツイの力を注入したら合体してああなつた。みたいな内容だつたはず。

そして、個人的な解釈になるけど、フリスクは人格が形成されるまで一番最初に落ちてきた人間のソウルで動いていて、playerによつて育成されていく。

その物語がUnder tale。

フリスクにとつての途中の物語。

それは中途半端だつたり平和主義だつたり残虐無慈悲だつたりと様々な道があるけど…。

もし、そのソウルやケツイが人間の身に余るほどの量だとしたら？

ここは現実だけど、

Under taleの要素もたっぷりある。

もしかしたら、人間でも強大すぎるケツイを持つと…溶けてしまうのかもしない。

僕が感じた嫌な予感は多分そこだ。

これって、かなりまずい事態だよね？

フリスクはなんで地下に来たのかは明かされてないけど、あれだけ高いところから落ちたなら致命傷もいいところのはず。

でも、最初の人間のソウルと、各playerのケツイによって動いているこの状況。

研究所で起きていた事件と共通点が多いところも事態を悪くする。

【FIGHT】【MERCY】

【ITEM】

*モンスターあめ *けつい

*棒切れ *包帯

【ACT】

*調べる *話す

*口説く *煽る

…僕はこの中でどれを、選ぶべきだろうか……。

*あなたは…

ニンゲン同士の激しい戦いを、

トリエルは啞然として眺めていた。

家のあちこちはナイフで切り裂かれ、小さな子供が投げたナイフは全てHOMEの天井や床、壁に突き刺さっていた。

小さな子供の方は時折苦しそうな表情を見せるも、基本的には不気味に微笑んでいる。

まるで戦闘を、いや。

敵を追い詰めることを楽しんでいるようだ。

それに対峙する青年。

彼の顔には恐怖の感情が見て取れる。

明らかに目の前の殺人マシーンを恐れている。

それでも青年は立ち向かう。

迫り来るナイフをギリギリで避け、突破口がないかを『check』している。

必死にもがいでいる。狭くなつた行動範囲を棒切れと包帯で補強し、壊されたらすぐに修繕し『check』^{調べる}。

被弾して泣きそうになりながら飴を齧り、迫り来るナイフを【FIGHT】して叩き落とす。

小さな子供は黒く染まりかけている赤いソウル。

青年は少し薄い色をした赤いソウル。

二つの赤は決して交差しない。けれども強烈なぶつかり合いを見せていた。モンスターのソウルがひび割れてしまいそうな余波。

これがニンゲン同士の争い。

こつそり覗いていたフロギーなどのモンスターたちは恐怖の感情を抱き、その場から逃走している。

けれどもトリエルは別の思いを抱き始めていた。

それは、『子供達が争うなんてとんでもない!』というものの。

彼女は元女王であるが、その前に母親だつたのだ。

故に、彼女は動き出す。

膠着していた戦いに、変化が訪れる。



*逃げた方がいいかもしない

*今あなたでは勝てない

【FIGHT】【ACT】【ITEM】【MERCY】

H P : 12 / 20

……あ”あ・痛つたいなあ・もう。

飴で体力は回復しても痛みは引かないのね…。

取り敢えずITEMから棒切れと包帯を取り出して戦闘画面は元に戻った。脆いから直ぐに壊れちゃうけど。

突破口がないかACTで調べたけれど、わかつたのは次に攻撃してくるパターンのみ。

それはそれで有り難い。考える時間は稼げるのだし。それでもこのままじやジリ貧だ。情けないことに僕はまだリスクの攻撃を完全に避け切ることはできない。

だからこのまま続ければこつちの負け。

こつちのターンを継続しようにも制限時間があるみたいだし…放つておくとリスクの攻撃が始まつてGame Overだ…。

詰み。1人じや無理。諦め。死

それぞれの単語が頭の中を駆け抜ける。

……まだだ。

僕の体力は残つてるし、攻撃にも慣れてきた。
絶対に攻略してみせる…！

【ACT】

*調べる

?* * フリスク? *トリエル

…へつ?

トリエルさん?

急に現れたトリエルさんの文字。

そういえば外に行こうと指示を出してから音沙汰もなかつたな…
戻ってきたつてこと?

あ、画面に出てきた。

「*まつたく。いけませんよ?

たたかいごっこも程々にしないと

大怪我をしますからね」

…いや、まあ、それはそう…ですけどね?
ごっこ遊びじゃないんですよこれ。

「*嘘はいけないわ。

…どうやら手を先に出したのはあなたね?おもちゃとは言つても
振り回すのは危ないでしよう」

フリスクの方を見て言つてる…?

「*私はこの子とお話しをしていますから、あなたは地下に行つてき
なさい。ジョーク好きのモンスターが怪我を診てくれますからね」
トリエルさんが僕にそう話しかけた瞬間、ACTの選択肢に変化が
起きる。

「…!」

僕は迷わずそのコマンドをタップした。

【ACT】

*調べる *話す

*口説く *煽る

?*助けを呼ぶ

*あなたは一旦逃げ出した…。